

# 核のない明日つくる

## 広島 64回目「原爆の日」

平和記念公園には6日未明から被爆者や遺族らが訪れ、慰霊碑や供養塔前で犠牲者に祈りをささげた。それぞれの話を聞いた。

### それぞれの思い

中区舟入幸町、無職、右田繁子さん(86) 妹(当時17歳)、姉(同25歳)を失った。2人を探して広島市内を歩き、被爆した。どこかに骨があると信じ、無縁仏があれば手を合わせる。戦後、娘は41歳でがんで死んだ。原爆のガスが私の体から移ったんじゃないかと不安。今も原爆を恨む。

南区本浦町、鷲見哲男さん(75) 被爆した妻は17年前、大腸がんで亡くなった。53歳だった。中区千田町で被爆し、父親を捜しに市街地に入った時に被爆したらしい。結婚した時、妻は被爆したと言わなかったが、当時は誰でもそうだった。今でも妻を思い出すと涙しか出ない。

山口市小郡下郷、兼重文子さん(85) 戦時中は鉄道の通信員。帰らぬ人となるかもしれないと思いつながら、何人もの若者を戦場へ送り込む手配を担った。終戦後は、疲弊しきった元兵士らで汽車は満杯だった。話すだけで涙が出る。安らかにお休み下さい、と手を合わせに来る。

中区舟入川口町、湯井恵美子さん(87) 当時は市外の高等女学校教師だった。原爆投下約10日後に、生徒と炊き出しを手伝いに入市し被爆した。俳人だった夫は「鶴よ十方に原爆ゆるすまじ」と詠んだが、戦争無き時代はまだまだ来ない。容易でないが、核のない世界を願う。

府中市、内田美佐子さん(76) 父と姉2人を亡くした。自分は爆心地から3キロ離れた女学校にいて助かったが、上の姉は左肩の骨に衣服がくっついていたのでやっと姉と分かるくらい焼けて見つかった。父と下の姉は今も行方が分からない。核兵器の怖さを知っていたら決して作ろうとは思わないはず。

廿日市市、無職、吉本和弘さん(78) 学徒動員で機関銃の部品を作る工場に勤務中に被爆。工場が倒壊して下敷きになった。同級生が12、13人亡くなった。64年たった現在、ほかの同級生もほとんど亡くなり、当時の話をする人がいない。子どもや孫に話すのが精いっぱい。原爆の記憶が薄れていくことに危機感を感じる。

中区舟入中町、沖正夫さん(77) 勤労奉仕先の天満町で被爆した。「逃げる途中に、のどが渇いて人の畑からトマトを採って食べた」と話していた母は被爆4日後に亡くなった。おばは、どのように亡くなったのか今も分からない。人間同士が殺し合うのは本今にばかな話で、戦争ほど怖いものはない。

被爆の妻、思い出し涙／核の怖さ知って／記憶薄れていくことに危機感



平和記念式典に参加したクリスティーナ・スパイカーさん(左端)ら留学生

市立大留学生ら記念式典に参列  
広島市立大学(安佐南区大塚東3)の夏期集中講座で平和学を学んでいる留学生ら約50人が6日、中区の平和記念公園であった平和記念式典に参列した。学生らは核兵器廃絶を願うヒロシマの心に触れ、現場で「平和」を学んだ。  
米カリフォルニア大学院生、クリスティーナ・スパイカーさん(23)は、平和について竹原さん夫妻を含

## ヒロシマの心「平和」学ぶ

あの朝、愛する人たちは、いつもと同じように母がよそったご飯を食べ、行ってきますと家を出て、建物疎開などの作業に汗を流していた。なのに一瞬の閃光の後、何もかもが奪われた。6日、帰らぬ人に花を手向けた被爆者は誓った。子や孫、ひ孫の世代や各国の同志とともに。核兵器のない明日をつくります。



被爆者代表として、霊碑に献花した花田貞子さん(71)＝安芸区＝と長姉信子さん(同19歳)を亡くした。

被爆者代表として、霊碑に献花した花田貞子さん(71)＝安芸区＝と長姉信子さん(同19歳)を亡くした。

### 初孫に誓う核廃絶

被爆者代表 花田貞子さん

め4人でよく話をする。協力して持っている。減らしていけたら」と言い、大学院でさらに国際関係学や平和学を学びたいと話した。昨年、原爆資料館を訪れたのがきっかけで平和学を専攻しているフランス人のハア人、アナスタシア・イバネンコさん(23)は「ロシアとアメリカは世界で最も多くの核を期待しているが、イスラエルがパレスチナを攻撃した時、何も言わなかったのはがっかりした。行動でも示していくことが大事だ」と述べた。広島は、学生にとってかけがえのない学びの場になったようだ。【村瀬優子】

疎開先から1週間後に広島市内の自宅へ帰ると、父は全身にやけどを負って傷口にはウシガワキ、9月19日に息を引き取った。被爆